五省会ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41−2481(代)
発行人　西能 正一郎

五省
一、至誠に悖るなかりしか
一、言行に恥ずるなかりしか
一、気力に缺くるなかりしか
一、努力に憾みなかりしか
一、不精に亘るなかりしか

日本人のこころ
生命科学の進歩のなかで
兼久文治

新春随想

新しい年がしらじらと明けるころ、不思議に私は毎年のように故郷を思う。私の故郷は九州の博多である。思いは亡き父や母や兄につながり、生きている妹たちにつながる。そして通り過ぎ去ったいろいろな人々のことを思う。だから元旦はだれにも会わない方がいい。だれともしゃべらずだまって独り酒をくんでいたい。あれもこれもとりとめもない思いにひたっていたい。

元旦は私にとってそんな〝思いやる〟一日なのである。

〝骨まで愛して〟

この話は新年にふさわしくない話かもしれないが、私はこのことを書こうと思う。それは二十何年か前の大晦日に死んだ男の話なのである。彼はどちらかといえば不器用でがんこな正直一途の警察官だった。定年を前に突然入院した。神経痛だった。長びくようで見舞いに行ったら夫人が、彼がその頃大流行の〝骨まで愛して〟を歌って聞かせてくれると笑いながら話してくれた。ラジオで覚えたらしく彼はきっと毎日毎日練習したのだろうが柄にもない歌をどういう心境の変化かと笑い合った。

思いやりの世界

そんな話を聞いて一か月も経たぬ、もう年が明けようとする深夜、彼の死を聞いた。彼の病名は実は骨ガンだった。主治医は病名をいわなかったが彼は「病名はわかっている。ただ最後まで女房にはいわないでくれ」としつこく頼んでいたという。夫人は死後始めて骨ガンであることを知った。葬儀は年明けに行われた。その夜ラジオから〝骨まで愛して〟が流れた。夫人は声をあげて泣いた。私は今もこれを思い出すだけで胸がいっぱいになる。思いやりとはこういうものであるぞ。それは日本人が長い歴史の中で温め育ててきた日本人のこころだった。それはしゃべるより察し合う世界なのである。

ホスピスの前提

〝ホスピス〟といって末期ガンのように助からない患者に苦痛を与えず平安に死を迎えさせる施設がある。日本は遅れているが欧米にはすでに数百に達するという。日本ではその施設の前提として、まずガンを患者に告げるかどうかの問題を解決せねばなるまい。欧米では九割九分告げるが日本は告げないことが多い。告げるべきだという意見も最近有力になってきている。が、ガンで兄を亡くした私だけの体験からこう思っている。日本人ほど大衆の医学知識が進んでいれば患者も家族もおおよその察しがついているのではないか。両方ともそうありたくないと願い、いえない胸の内をお互いに察し合い、思いやり、いたわり合っているのでないか。そんな日本人の心と心を結ぶ見えない温さの中で生を全うするのもいいのではないか。

死生観の違い

こんな考え方は勿論欧米では理解できない。というより日本人の方が特殊なのである。もっと大胆に割り切らなければ日本はこれからの恐ろしいスピードで進む生命科学から取り残されるかもしれない。たとえばアメリカの人工心臓移植のように、明らかに患者をモルモットにした人体実験を強行し、これを患者も家族も医師も、そして世論まで納得する国の方が医学の進歩は早いだろう。しかし、私はこと生命に関する限り日本人はパイオニアにならなくてもいいと思っている。日本人には日本人の死生観がある。今、それをくどくどと述べる余白もないが、〝思いやり〟につながる日本人の心を押しのけてまで無理に手をつけねばならぬことかどうか最近の科学には首をかしげることが多い。

日本人には日本人の生き方があり死に方があると思っている。

（北日本新聞〝天地人〟執筆者）

子供のころのお正月
西能 正一郎

あけましておめでとうございます。

追憶しますと、私の子供の頃のお正月は何しろ素晴しいお正月であったように思われます。昭和十年頃といいますと、日本経済の落ち目の時代で、その頃の大人達は苦しみあえぎながら、毎日の生活を支える事がやっとであったでしょうが、子供には一向に関係のないことでありました。

大晦日の晩、暗くなるまで大掃除や、お鏡飾りやら、お正月を迎える準備を終えて、一人前にお手伝いをしたつもりの私は、胸を張って父と一緒に風呂に入ります。ランプの暗い灯りでは窓越しに外の景色がかなりはっきり見え、ほの明るい空の下には砺波の散居村の黒々とした木立ちの塊が遠く近くに点在して家々から洩れる燈火が星のようにキラキラ美しかったのを憶えています。

首まで湯につかって数を算えさせられながら今晩はねむれるかしらと、心配になるほど、明日から来るお正月というものが嬉しく、期待と、ときめきを抱いたのであります。紅白歌合戦はおろか、ラジオさえもありません。お正月になってもお年玉をもらって街に買い物にゆくしきたりも私の家にはありませんでした。夜ねている間に母が枕元にそっと小学館の雑誌をおいていってくれることだけです。朝暗いうちから目が醒めて床の中で息を殺して起きる頃合いを見計っていました。顔を洗い、一同揃ってのびのび自由に振舞えたのは一年のうちでこの三カ日だけでした。四日になると様子が変ってお手伝いに勉強に叱り飛ばされる日が来るのです。

初詣があり、買初めがあり、テレビがあり、ゲームの揃っている今の子供達は果してあの頃の私達に負けないほどの嬉しくて仕方のないお正月を迎えているでしょうか。週休二日制あり祭日の洪水の中では三カ日の休みも影が薄れるでしょう。

嬉しいと思う、仕合せだと思う、それはその人それぞれに受取り方次第で決まるものです。物も金も暇もなかった昔の日本の農村では、今に比べると、ほんとに微々たるしあわせもほんとにすばらしいものであったのに反して、高度に成長した今の日本では、ちょっとやそっとの事では身のまわりにしあわせがやって来なくなったのではないかと思われます。

失われたしあわせを取りもどすには、みんなが、もっと地味に地に足のついた生活を取りもどすことが必要ではないでしょうか。文明は恩恵にあずかるもので、浪費するものではないと考えます。

嬉しくて仕方のない三カ日
足のついた生活を取り戻そう

神仏にお参りすれば後は天下を取ったようなもの

子供心に眠れないほどお正月が嬉しかったのは、お正月の三カ日は大人も子供も家中が少しも働かなくてよく祖父や父は朝からチビチビやりながら謡をうなったり碁を打ったりしていましたし、母も食事以外はこたつでうたたねをする時間がありました。子供達も何をして遊んでも叱られる心配はありません。餅でも干柿でもみかんでもほしいものはなんでも文句をいわずに食べさせてもらえた事であります。

あすなろ

あけましておめでとうございます。こどものころの正月を覚えていますか。新しい服や着物なんか着せてもらってお膳にすわると急にあらたまって口数も少なくなり、おごそかな顔をしてお雑煮を口にします▼そんな緊張も、子供心に新しい大きい時間のうねりが始まる幕開けに心をときめかしていたのではないでしょうか。家族連れ立って初詣でや年始のあいさつ回り。故郷を出て長く会わなかった兄や姉や親類の人々が顔をそろえるのも楽しみでした。みんなよく笑い、きげんよく紙にひねったお年玉をくれたものです▼やがて私は故郷を出て外で暮らすようになりました。兄姉の心がよくわかります。おふくろの作った手づくりの〝おせち料理の味のおいしさもわかりました。いつも景気のいい顔をしていたが、きっと仕事があまり面白くなく、借金に追われて職場を変えようかなどと思っての帰郷もあったに違いないという私です。▼そんなことはおくびにも出さず「仕事の方もまあまあで…」などといっていたに違いありません。おふくろの味が身にしみたのはむしろそんな正月だったでしょう。▼みんな辛いこと、苦しいことがあるんです。でも一九八三年の新しい出発。「まあひとつよろしく」と笑ってスタートしようではありませんか。

新年明けましておめでとうございます　昭和58年
医療法人 財団五省会

理事長 西能正一郎
常務理事 林 敏彦
理事 住 栄作
理事 米田 寿吉
理事 岸口 繁
理事 西能 綾子
監事 石川 実
監事 筧田 英二
評議員 稲垣 忠一
評議員 尾山征一郎
評議員 重松 尚
評議員 神沢 幹夫
評議員 西能 孜
評議員 西能 竑
評議員 坂本 重一
評議員 土田 亮一
評議員 豊田 文一
評議員 古沢 富美
評議員 堀 政夫
評議員 松井元太郎

健康法の問題 (13)

矢野三郎

健康法は人間が何千年も前から取りくんできたテーマであり、古代の医学はいずれも健康法と深いつながりをもっていたように思う。インドのアーユルヴェーダ、中国の漢方医学など、現在、これらは一括して伝統医学と称せられているが、現代医学とは別の流れとして世界各地に拡がって、各種の民間療法や健康法の基盤となっている。

いずれも深い人間理解を土台としており、現代医学にみられぬ特色をもっているが、科学という立場からみるとき、これらの伝統医療法として、食生活の占める役割は大きいが、昨年、アメリカでは厚生長官が「食事によるガンの予防法」に関する研究を強力に推進するという言明を行っている。

動物実験の段階では、ビタミンA、C、Eなどがガンの予防に役立つことが証明されている。そして、まだデータは十分ではないが、ビタミンAやその材料になる物質を含む緑黄野菜を摂取していると、肺ガン、膀胱ガン、喉頭ガンにかかりにくく、ビタミンCは胃ガンや食道ガンを予防するという可能性も示されている。

しかし、一日量としてどれぐらいのビタミンを摂取していると予防効果があるのかについては全く不明であり、アメリカの研究者たちは、当面のガイドラインとして、脂肪をへらし、野菜やくだものを毎日たくさん食べるようにと奨めている。

ビタミンCについては、ノーベル賞受賞者でもあるポーリング博士が、かぜの予防に有効であると唱えて注目されているが、これも科学的な証明はむつかしいようである。

シドニー大学では95組の一卵性双生児を対象として片方にはビタミンCを百日間内服させ、他方には偽薬を与えて観察したところ、ビタミンCを飲んでいた者はかぜにかかっていた期間が、飲んでいなかった者に比べて19%だけ短かくなったという結果を得ている。要するにどちらも同じようにかぜにかかったわけで、予防効果は確認されていない。

食事やビタミンでガンの予防ができる――これは一九八三年の初夢としてふさわしいが、現実の問題としては科学的に解明されるには何十年もかかるのではないだろうか。

ところが私たち人間の健康に対する欲求は、それまで待つことを許さない。アメリカでは今や空前の健康食品ブームを迎えているという。九州大学・村上助教授のお話によると、健康食品の専門店は全米で七千店、総販売高は約五千億円（年間）に達しているという。商品の中、やはりビタミン類が多く、約35%を占めているそうであるが、「年寄りばかりだった利用者が、若い層まで広がってきた」という事実は只事でないように思う。

わが国でも、これに劣らず健康食品ブームがおこっているが、おじいさんが何種類ものビタミン剤を魔術のように飲んでいる姿が新聞マンガの題材になっている――ここに健康科学にうらづけされない健康法の現実が示されている。

（富山医科薬科大学・教授）

わきおこる食品ブーム

食品やビタミンでガン予防

お正月を迎えて

入院患者さんの感想

歩行を取り戻して

年賀はがきを心楽しく書くことができた。それというのも、西能病院に転院して五カ月有余にして、杖にすがりつつも、自分の足で大地を踏むことができるようになったからである。「お蔭さまなり」と、万感胸にせまるものがある。

あの有名な一休和尚が「門松は冥土の旅の一里塚」と、詠んでいるが、そのとおりであると考える歳となった。

しかし、私は老人シルバーの会員として、いささかなりとも社会に貢献することを幸甚の生きがいとしたい。一日も早く完全な歩行を取り戻し、社会復帰できることをお正月に当り祈念する次第であります。＝重杉真行（六六）＝

孫と、いっしょに

お正月を迎えたのは今年で七十七回目であります。病院での正月は二回目。

今年もお正月は家庭に帰って、孫（男一〇）と一緒に全員五人が家族健康、家庭円満、病気全快を座敷に安置してある神、お正月気分を満喫。孫が大きな口を開いて温かいおしるこかぜんざいを腹一杯飲べるのを、そばでじっとながめているのが楽しみです。また永年続いている年賀状も年を取る毎に懐しい一枚一枚に昔日を忍び、忘れ得ぬものの一つでもあります。＝南部武雄（七六）＝

身にしみる看護の手

何時だったか、永六輔さんの講演を聞きました。「恵まれない人に愛の手を」とよく言うけど、人間には右と左の手しかありません。段差があって困っている盲人の方がいたら安全な所まで案内してあげる優しい心を皆んなが持っていたら、それでいいんだと思います――と言うお話でした。

こんな話が身にしみて感じるのも、思いがけない独創だが、もし今と異なった環境で生活したなら一日24時間という今を、24時間以上に出来ると思う。

例えば、僕がここに入院して早一カ月半が過ぎ去ってしまった。早といっても初めての一週間の出来事はとてもよく覚えている。

しかし、今から一週間前に何があったかと聞かれても、それ相当の事がなかった限り思い浮かばない。それだけ初めの一週間は以前と異なった環境にいたんだなあ）と思うし、又新しい発見も出来たんだと思う。今の自分の生活を見つめ直してみると案外今年は、違った意味で新しい発見ができるかもしれない。正月を迎えたようだ。＝吉田真幸（一五）＝

慣れとは恐ろしいものである。これは僕のである。

病院増改築の苦労ばなし

既設棟で工事打合せする中島部長（右）

西能病院の第三期増（改）築工事の起工式は昭和五十六年五月二十三日におこないました。建築工事は竹中工務店です。

設計の関係から玄関と待合ホールを取り壊したので、玄関は救急患者入口との併用になりました。また待合ホールは廊下をはじめ空いている場所を使いました。しかし狭いので外来患者さんが待っているところがなく、迷惑がかかります。

そこで、これまで午前九時からの診療開始時間を四十五分早めて午前八時十五分からにしました。回診も午前やっていたのを午後に切り換えるなどして受け入れ体制を整えました。これも、みなさんの協力があったからこそ、スムーズにいったのであります。

工事の騒音で、入院患者さんから苦情がでました。

そこで、騒音のひどい時間を、あらかじめ回覧して、静かな場所で休んでいただくなどの処置もとりました。やがて「いい病院ができるのだから我慢しよう」との協力の声もでてきました。

患者サービスを積極的に取り入れ、よい環境づくりを重点にしていましたので、壁や床の色にまで細かく気を配りました。

これらは、すべて院長の指示を仰ぎました。

院長の方針で防火設備には万全を期し、消防署のきびしい指導を受けました。

その院長が、十月二十日からやく一カ月間、富山医科薬科大学附属病院に入院したので、毎日二回から三回たずねて指示を受けました。病院業務の打ち合せもあり、院長も安閑としておれませんでした。

既設棟から新築棟への移転準備は一カ月前から取りかかりました。病院の業務を一日も休まないためには患者さんや職員の協力が必要でした。おかげで、九月二十六日に、一日だけで総ての移転を完了、二十七日から業務をはじめることができました。なかでも、患者さんの二十年間分のレントゲン写真など重要物品の移送を既設棟の四階から新築棟の六階まで全職員のリレー式で、一時間かかってやりとげたのは、いいアイデアだったと思います。

騒音に、がまんの患者さん

壁や床の色にも気を配る

移転したあとは、カギがかからない、水がでないなど、いろいろな問題や苦情が持ちこまれ、毎夜十時ごろまで院内に待機していました。十日間ぐらいで、どうにか落ちつきました。

ね、増築棟の西側に隣接して強力なエネルギーセンターが昭和五十六年十一月に完成しました。これは既設棟の一階にあったボイラー室を取りこわして新設したもので、地下が浄化槽、二階がボイラー室と電気室になりました。新設棟の冷暖房はすべて電気になりました。停電になっても、半分は自家発電でまかなえる体制を整えました。

新年を迎え、改築工事も順調に進んでおります。これも、患者さんや職員の皆さんのご協力のおかげです。有難うございます。（中島総務部長）

ねんりん ⑭

西能病院のあゆみ

思い出を語る

〈6〉

中島　水島さんも給食係としてこられたのですね。

水島　ハイ、そうです。三十七年八月にきました。農協滑川病院に勤めていた姉の長女の紹介でした。勤めたころの深い印象としては、「女性の患者さんたちの間で、院長の男前が評判になっていました。院長には厳しい面もありましたが、やさしい面もありました。

院長　実は、若い方（看護婦）を引っぱりこむつもりでいたのが、水島さんがきてしまいました。（笑い）

堀井、石倉　その看護婦さん（水島絹子さん）

出席者（敬称略）

△元勤務者＝久米信子、高木信正、丸岡ミサヲ、盛田美奈子、開発正子、岡本春子、米田絹代

△現勤務者＝堀井富美子、石倉喜一、水島敏子、津田勝美、川西信子、広長百合子、鎌貫、伏木峰子

△西能正一郎（院長）

西能　薫（副院長）

△司会、中島総務部長

院長　実は、若い方（看護婦）を引っぱりこむつもりでいたのが、水島さんがきてしまいました。（笑い）

堀井、石倉　その看護婦さん（水島絹子さん）

中島　院長にはもう百番代のこともありました。

ま、ともかく海兵に合格したんだ、オレもまんざらではないぞと、鼻高々で入校しました。ところがですよ、真っ先にそのまんざらが、少しいっしょに勉強するうちに、私が逆立ちをしても追いつけないような秀才がいっぱいおるということがよくわかりました（笑い）

――ほう、それで……。

丸岡　「規律が厳しいうえ、やり手で、それに引きずられて、みんな一生懸命やっていました。

院長　あのね、私は丸岡さんの足もとにも及ばないんです。これは、どうも恐縮です。

中島　チョウ・ネクタイの院長は、桜木町でもならしたようですね。

石倉　びっくりしたことがありました。と、いいますのは、「院長先生が終着駅につかれましたから、みなさん安心しておやすみください」という女性の電話をはじめて受けとったときでした。

「福野駅は終着じゃないし、どこの終着駅だろうか」と、考えてみたりしていました。それから間もなくでした。院長が飲みにでたあと、外傷患者が入り、みんなが院長を探すのに桜木町に電話をかけているのをみて、やっと終着駅が桜木町にあることがわかりました。

一同　私たちも、よく「終着駅につかれました」という電話をうけました。

院長の男前が評判に

終着駅は、どこの駅？

院長　どうも、すみませんでした。家内は、前の月の請求書を取りだして、そこへよく電話をかけていたようです。はじめは、どこへでも飛び込んで飲んでいたんですが、そんなことなどがあってからは、行くところを決めましたんです。

中島　ネオンの話は、これくらいにして、仕事の方は、相当忙しかったようですね。（つづく）

わたしはこう思う

秀才はいっぱいいる

その分オレは身体で勝負

――「頭がいい」は大間違い

――それに合格されたんですから、先生は大変な秀才だった……。

――「いやいや、とんでもありません。そのことはあとでお話します。

中学時代の成績といったら、とてもムラがありまして、二百人のうち十番くらいのこともあれば百番代のこともありました。

ま、ともかく海兵に合格したんだ、オレもまんざらではないぞと、鼻高々で入校しました。ところがですよ、真っ先にそのまんざらが、少しいっしょに勉強するうちに、私が逆立ちをしても追いつけないような秀才がいっぱいおるということがよくわかりました（笑い）

――ほう、それで……。

「規律が厳しいうえ、大変なスピード教育でしてね、毎晩寝る前一時間半か二時間か忘れましたが、自習時間というのがあって、その間に宿題をやっておかねばならないんです。ですから、消灯後、毛布をかむり、懐中電灯をつけて宿題をやっているやつもいました。

ところが、自習時間に宿題をさっさとやってのけ、家へ手紙を書いているやつがいるんです。何人もいるですよ。私は宿題には湯が立たず、毛布をかむってやることもあきらめていました。そんな秀才をみていますと、私、自分がいやになってしまいましてね（笑い）」

――「自分が頭がいなんて思うのは大間違いで、世の中には想像できないほど頭いいやつはいっぱいいるもんだということをつくづく知らされました。

それからは私、頭がいいと思ったことはありません（笑い）。いまでもそうです、本当に……」

――しごきの訓練

――海兵の教育とは、具体的にはどのようなものでしたか？

「一口にいいますと、短時間にたたき込む教育ですね。私がちゃんと教育をうけたのは、四カ月余りです。四月六日に入校し、八月十五日に終戦になったんですから。

その間に、たとえば数学は微分、積分はみんな終わっていました。終戦後、高校（旧制富山高校）へいったわけですが、高校三年間は、数学の勉強を一つもしなくても済みました。それで、いつも満点でした――海兵では数学のほかにどんな課目があったんですか。

「そう、英語に力学、物理ですね。それに国語電気、航海術、ほかに修身のようなものがありました。そして、いろんな訓練ですね――

「この訓練は言語に絶するほど厳しいもので、気絶するまでしごくわけです。

船の訓練ばかりじゃなくて、陸上訓練もありましたね。そのころは、もう沖縄に米軍が上陸していましたね。ね、増築棟の西側に隣接して強力なエネルギーセンターが昭和五十六年十一月に完成しました。これは既設棟の一階にあったボイラー室を取りこわして新設したもので、地下が浄化槽、二階がボイラー室と電気室になりました。新設棟の冷暖房はすべて電気になりました。停電になっても、半分は自家発電でまかなえる体制を整えました。

新年を迎え、改築工事も順調に進んでおります。これも、患者さんや職員の皆さんのご協力のおかげです。有難うございます。（中島総務部長）

海兵の訓練が自信に

気絶するほどやれるんだ

医療法人財団五省会
西能病院
理事長　西能正一郎

厳しかった海兵の受験

――現在は受験戦争時代ともいわれていますが、当時の海兵の試験も大変むずかしかったのでしょう。

「そうですね、試験は確か三日間だった思います。いまの中部高校、そのころは神通中学といっていましたが、そこが試験会場で、県下の海兵志願の連中がみんな集まるんです。

よく憶えていますが、丸襟、サルマタ一つ、全身を写した手札大の写真をそれぞれ持ってね。一つの教室に受験生は四十人です。

海軍はやっぱりスマートだと思ったのは、毎日午前中だけ試験があり、午後五時にだけ試験がありまして、その上に頬をつけるようにしてほふくする。練兵場の端から端まで五、六百メートルを、朝七時から一日がかりです。

姿勢がちょっと高いと、教官は「西能生徒、戦死」と怒鳴り、二メートル後退させられるわけです。

それで各分隊が到着時間を競うのですから、いやでもやらねばなりませんね。カンカン照りのところでやっていますとね、気がおかしくなって気絶しそうになるんです。すると、バケツで水をかぶせられて、また御苦労様るわけです。おふくろの顔がぱーっと浮んでくるんです。

「しかし、こうした厳しいいろんな訓練は、私にとっては、とても大変な自信になりました。私はその後社会にでて、気絶するほど一生懸命に力をだしたことはまずありませんでも、オレは気絶するまでやれるんだという自信をもっています。

それと先ほどいましたように、頭が悪いということがよくわかっているものですから、体でもってみんなに負けないような仕事をするんだという気力を植え付けられたように思います」（つづく）

わたしはこう思う

筆者偶感

"わが青春"を語る（上）

人それぞれに歩いてきた道がある。人生がある。人生は永い一人旅である、といった人もいる。

一人の人がいろんな未知と遭遇し、乗り越えてきたさまざまな話に耳を傾けていると、思わずこの人が、と顔をみつめるようなこともあればまた、そうですねと相づちを打ち、共感し、こっちが嬉しくなることもある。そして己と比べてみたとき、数々の人生の教訓を得ることができる。さて今回は、医療の話からしばらく離れて、「西能正一郎院長の"わが青春"」から話をはじめよう。

――いまの若人は、本当はそうでないのかもしれませんが、一見、青春を享歌しているようですね。先生の青春時代はどのようでしたか。

「そうですね、いまの若人の見方からすれば、青春はなかったということになるかもしれませんね。

ですけれども、ゲートルを巻き、木銃をかつぎ、道を整列して歩いていた私どもにも、やはりそのときそのときの青春はあったような気がします。

では、どんな青春であったのかといますとね、もちろんきれいな女学生をみると胸が躍るようなこともありましたが、そのようなことは忘れてしまった感じで、むしろ自分たちが日本のために何をするかということが、青春時代の大きな心のウエートを占めていたような気がします」

――日本は戦時状況だったのですね。

「昭和十六年に太平洋戦争が始まったんですから、私が中学に入ったときは戦争中です。中学二年から陸軍幼年学校を受験できたものです。

それで、海軍兵学校を受験するころは、太平洋戦争の末期でして日本が負けるか負けないかのせとぎわでした。大本営は勝つような発表ばかりしていましたから、勝つことにはなっていたのでしょうが、国民はみんなで国を守らなければならないという気持ちになっていました。そのとき私は十六才、もう少し大人になっておれば、戦争はよくないとか、いやだとかいった批判はできたと思うんですが……。当時は私自身が、オレが戦争にいかないと、日本は負けるんだという気負いみたいなものがありましたね」

カッコいい海軍にあこがれる

――それで海兵へいかれた。陸軍より海軍を選ばれたのには何か特に理由がありますか。

「いやいや、陸軍より海軍のほうが格好がよい。どうせなら海軍のほうが……（笑）。実に単純なものでした」

――「それに海軍は、いまでいうPR活動が上手だったようですね。

まあ、強いてきっかけといえば、鄂子文六の小説『海軍』を読んだことです。中学三年のときです。小説の内容は、真珠湾攻撃をした軍神の生いたちを書いたものです。そのようにして国のために散っていった軍神に強いあこがれを抱いたんです。

海兵に合格したら、もう鬼の首をとったようなものでしょ……」

厳しかった海兵の受験

――現在は受験戦争時代ともいわれていますが、当時の海兵の試験も大変むずかしかったのでしょう。

「そうですね、試験は確か三日間だった思います。いまの中部高校、そのころは神通中学といっていましたが、そこが試験会場で、県下の海兵志願の連中がみんな集まるんです。

よく憶えていますが、丸襟、サルマタ一つ、全身を写した手札大の写真をそれぞれ持ってね。一つの教室に受験生は四十人です。

海軍はやっぱりスマートだと思ったのは、毎日午前中だけ試験があり、午後五時にだけ試験がありまして、その上に頬をつけるようにしてほふくする。練兵場の端から端まで五、六百メートルを、朝七時から一日がかりです。

姿勢がちょっと高いと、教官は「西能生徒、戦死」と怒鳴り、二メートル後退させられるわけです。

それで各分隊が到着時間を競うのですから、いやでもやらねばなりませんね。カンカン照りのところでやっていますとね、気がおかしくなって気絶しそうになるんです。すると、バケツで水をかぶせられて、また御苦労様るわけです。おふくろの顔がぱーっと浮んでくるんです。

「しかし、こうした厳しいいろんな訓練は、私にとっては、とても大変な自信になりました。私はその後社会にでて、気絶するほど一生懸命に力をだしたことはまずありませんでも、オレは気絶するまでやれるんだという自信をもっています。

それと先ほどいましたように、頭が悪いということがよくわかっているものですから、体でもってみんなに負けないような仕事をするんだという気力を植え付けられたように思います」（つづく）

〈14〉

☆☆☆☆☆☆☆☆

美しいものが見えてきた

〈第十二信〉

松下　英勝

☆☆☆☆☆☆☆☆

院長先生

年賀状を書き終え、ホッとして歳を越し、新年を迎えるつもりでしたが、何かすっきりしません。大きな借金をしたまま、いい訳けもせず、忘れ物をしたまま…。そんな重苦しい感じがしてなりません。

自分は当園へ入所し、院長に「手紙を出しません」と便りをしたのですが（資格がないので）、その後も五省会ニュースを送って貰い、やっぱりとうございました。そして、出来の悪い俺、迷惑かけてすみません。

でも、今年は最後に胸を張って（あまりエバレないのです。きっかけが分なりに精一杯生きていきます。

何か特別のことをなそうと焦ることなく、目立たずとも地道に人生を歩もうと思ってます。現実というものの中で生きて行く覚悟が最近やっと出て来たように思います。

昭和五十八年は良い歳であることをお祈りします。皆さまの御多幸をお祈りします。

（姫路市打越一一〇〇、重度身体障害者授産施設　愛光園　松下英勝）

＝旧ろう二十三日着＝

◇◇◇

甘えず、精一杯生きる

〝淋しくても、嬉しくても酒は飲みません〟

今年のお礼と、お詫びは今年のうちにと思い、ペンをとりました。

今年も一年、ご指導ご鞭撻ありがとうございました。お心づかい、ありがみっともなくて）報告できることがあります。

一つは、煙草を七カ月あまり今日にいたるまで一服もすってません。

二つは、どんなに哀しく淋しく、楽しく、嬉しくとも酒は飲みません。

酒でごまかすことをやめました。酒でさんざん恥をかきました故、〝禁酒〟といっても、時にはビールぐらい少々飲みますが、迷惑をかけるほど飲みません。

院長先生、自分も男です。世間に甘えるつもりはありません。自分は自

自宅に進学の相談などに父兄や生徒が訪れる。同僚が学校のこと話していく。「そんなとき、対等で仕事に参加しているような錯覚をおこします。精神的には普通の人と変らないのです。それが支えにもなっていると思います。やはり一人でいると考えこむこともあります。多くの人に接して身障者であることを忘れる時間をできるだけ多く持ちたいです」。

そして最後に「こんな、からだですが、新しい世代の人たちのお手伝いをしたい気持ちでいっぱいです」と結んだ。

大地を踏む ⑪

富山市大町一区西部２４３

平野正夫さん（50）

食堂にデンと備えつけられた平行棒。長女（高校二年）に両下肢の装具をつけてもらい、車椅子から自力でやっと取りすがって立ち上る正夫さん。（写真）そばで、じっと見守る父親の政平さん（七九）。無言の中にも固く結ばれた家族の愛情がにじみでている。毎日やく三十分、起立訓練に精を出す。

この平行棒は西能病院の指導をうけて持ちこんだ。正夫さんは、不自由な両下肢の訓練のため、今年四月に同病院に入院、八月に退院した。その後も平行棒、マット訓練などに週二回、家族の車で通院。いまも痛みや、しびれが走っている。

車椅子生活をよりよくするため、鉄筋二階建ての家を今年六月から七月にかけて改造した。玄関口のスロープ化、トイレには手すりや、つり輪をつけた。浴室は浜松からピアノ型を取り寄せた。そのほか、車椅子から降りる際に使用する木製の道具も。将来のことを考えて、階段には後向きにずって上れる手すり。応接間も車椅子で自由に使えるように広くするという。家の中の、あちこちに家族五人（ほかに母、妻と長男）の協力があふれている。

周囲の励ましが支えに

自宅に平行棒を備えつける

正夫さんが「リハビリは、私のこれからの健康のよりどころ、一生の仕事です」といえば、政平さんは「家の中の環境をよくすることが、家族たちの精一杯の気持ちです」

英語の教師の政夫さんは昨年四月、勤務先の富山中部高校で倒れた。富山市民病院に入院、胸椎に腫瘍があることがわかった。その後、両下肢が完全に麻痺した。倒れる二年ほど前から両下肢に、しびれや軽い痛みなどの不快感があり、近くの医院でヘルニアの治療を受けていた。

同年五月、金沢医大脳神経外科に入院、六月に腫瘍摘出の手術をした。その後、リハビリのため金沢脳神経外科病院と富山労災病院に入院していた。

突然襲った不幸について正夫さんは「ある程度覚悟していました。それに、わりにのんきものでしたので、早い時期に〝なるようになる〟のサトリを開きました」。

だが、ショックは大きい。それを温かく包んでいる周囲の人たち。教え子、父兄、教職員、友人そして親戚の人たちが見舞いに訪れ思い思いに励ましていくが、「顔を見るだけで嬉しいです」と述懐する。

正夫さんは休職中。病院に通院する以外は、めったに外に出ない。一番楽しいのは午後から応接室で、ゆっくり音楽鑑賞に耳を傾けるひとときだ。これまでできなかった父との世間話にも花が咲く。長女の勉強もみてやれる。読書や英文タイプをうったりして、なんとなしに時間がたって、それほど退屈していないという。

迎春

本年もよろしくお願い申し上げます

医療法人　財団五省会　西能病院職員一同

青木茂　穴倉栄　荒井紀夫　荒井三津子　石倉喜一　一島洋美　伊藤勝仁　井上千恵子　今井礼子　岩城真由美　江尻栄子　老田奉夫　大浦春美　大島佐登美　奥平美和子　各川静子　小幡英子　大日方夏代　片岡美代子　金谷智恵子　唐島田美和子　川口知明　川崎伍一　川西明美　川西信子　北野佳代　北井ひとみ　木下春美　木下文雄　久世智保子　九里淳子　西能正一郎　西能竑　不雅子　志鷹淑恵　坂田隆夫　西能綾子　杉浦えみ子　杉浦達昌　杉村洋

関待子　大門百合香　滝ゆかり　田上慶子　高村美和子　竹林一子　竹丸道夫　多胡悦子　田中純子　田中行久　谷英美子　谷かをる　谷川美和子　谷野ノブ子　田畑朱美　塚原博子　津田勝美　津田美智子　土田智恵子　恒田喜代美　坪内奈津子　寺崎民子　塘添誠次　飛田勉　土山隆子　中島曠　中山玲子　永森房子　中山益美　中山栄子　中岡勉　中崎秋子　橋本秀輝　服部真知子　広長百合子　吉田美喜子　伏木峯子　藤沢伸江　二口雅子　船木芳美　古井良洋　古沢富美　堀井富美子　堀井喜代美　堀部佳恵

前田静香　松田伊佐子　松永喜志子　松永幸恵　水口洋子　水島敏子　三ツ松節男　三原美樹雄　三原八重子　宮尾英新　宮沢和子　宮本直美　村田次子　桃井玲子　森一美　森守内弘義　森川渥子　森田由紀　森田吉典　安井好子　安川敏一　安川みどり　安田十四子　山口明江　山崎真由美　山本玲子　用水とも子　吉岡勉　吉崎秋子　吉崎智　吉田範子　吉田美喜子　吉村靖　吉本和子　鎧政行　鎧貢　若栗悟

（以上、百二十一人、五十音順、昭和五十七年十二月末現在です）